

## 青森県立高等学校魅力づくり検討会議第1分科会（第3回）概要

日時：令和5年9月4日（月）

13：00～16：00

場所：県庁西棟8階 中会議室

### <出席者>

#### 第1分科会員

香取 真理 分科会長、葛西 崇 分科会副会長、岩川 亘宏 委員、  
中村 拓也 委員、花松 憲光 委員、米内山 裕委員、  
及川 正顕 専門委員、柿崎 朗 専門委員、川野 優子 専門委員、  
北城 高広 専門委員、小森 直樹 専門委員、坂上 佳苗 専門委員、  
田中 正也 専門委員、種市 朋哉 専門委員

#### 県高等学校長協会

大瀬 幸治 理数部会長、久保田 千夏 英語部会長、  
清川 和幸 八戸東高等学校長（表現科）

### 1 開会

### 2 調査検討

#### 学校・学科の在り方（各学科等の現状と今後の方向性）について

##### ①普通科

県高等学校長協会普通部会長である八戸北高等学校 校長 種市専門委員から、次のような意見発表があった。

- 青森県立高等学校将来構想検討会議の答申や、青森県立高等学校教育改革推進計画基本方針を踏まえ、グローバル・リーダーとして社会を牽引する人財や、社会人・職業人として自立する人財、地域を支え、社会に貢献する人財等の育成に取り組んでいる。
- 選抜性の高い大学等、上級学校への進学対応はもちろん、進学を希望しない生徒に対する就職指導も行うなど、幅広い教育を提供する役割を担っている。  
上級学校への進学については、例えば、本県の喫緊の課題である医師不足に関して、医学部への進学者や、地元に残る医師を増やすため、県と連携しながら取組を進めるなど、進学だけ見ても非常に幅広い対応を求められているのが現状。
- 各校の特徴はそれなりにあるものの、教育環境が画一的・均質的であり、子どもたちの学びの多様化に対応できていないという課題がある。講習や進路学習会を実施するなど、可能な限り個別にきめ細かな対応をしているところではあるが、生徒の進路希望も様々であるため、対応に苦慮しているところ。

- 上級学校への進学のためには、国語、数学、英語などの教科の授業時数は多ければ多いほど良いが、カリキュラムを組むに当たっては、各教科1時間でも多く授業時数を確保したいとの思いは同じであり、限られた授業時数の中で、生徒の進路希望に対応するためにどのようにすれば良いか、毎年頭を悩ませている。
- 普通科として、地域との連携やグローバル教育、STEAM教育などを推進していくことも必要であるが、上級学校への進学のため、まずは最低限必要な授業時数を確保し、ICTを活用しながら、日々の授業を魅力あるものにしようと努めることで精一杯の学校が多く、なかなか手を広げることが難しいのが現状。決して、現状のままで良いとは思っていないが、第一に優先すべきは、生徒の夢や希望、保護者の気持ちであり、それらを無視するわけにはいかないというジレンマを抱えながらやっているというのが正直なところ。

普通科について、委員から次のような意見があった。

- 農業科がある高校と工業科がある高校に勤めたことがあるが、県内の農業科がある高校、工業科がある高校は、それぞれ向いている方向が同じであり、学力もそこまで差がない。人事についても、工業を専門とする教員は工業科がある高校を、農業を専門とする教員は農業科がある高校を動いて回るため、教員が目的を持ちやすいと思うが、普通科となればそうはいかない。

先程、医学部への進学に向けた取組を行っている高校もあるとの話があったが、そういった高校は県内でもごく僅かしかなく、農業科がある高校と工業科がある高校と異なり、同じ普通科であっても各校で学力等にかかなりの差があるのが現状であるため、普通部会としても苦しいのだと思う。

一方で、普通科は、その学校や生徒の目標に応じてコースを設置したり、様々な企画をしたりするなど、工業科や農業科と比べて、様々な工夫により大胆に考えていくことができる学科だと考えているので、そういったことも有効に活用しながら、生徒を伸ばして行ってほしいと思う。

- 先程、各教科の授業時数は多ければ多いほど良いという話があったが、授業時数について具体例を示してほしい。
  - 各教科や科目によって異なるが、理科を例に挙げると、大学進学を目指している学校であれば、化学は週4時間確保しているところもある。学校によっても異なるので一概には言えないが、社会も大体週4時間というような感じである。
- 各校において、文部科学省が定めた学習指導要領を踏まえてカリキュラムを組んでいると思うが、学習指導要領に授業時数は示されていないのか。
  - 教科等ごと、学年ごとに標準授業時数が定められている。

- 将来自分が何をしたいのか、どのような職業に就きたいのかというのが入学時点では決まっていない中学生が多いと思う。そういった意味では、高校卒業後の進路選択の幅を広げるといふ観点において、普通科が一番良いのではないかと考える。将来どのような職業に就きたいのか、その職業に就くにはどのような進路を選択すれば良いのかということを経済3年間でじっくり考えることができる点は、普通科のメリットが大きいと思う。
- 普通科において、キャリア教育の充実を図るなど、将来の職業について考える機会を、これまで以上に提供すべきであるとする。普通科の現状をお聞きし、かなり厳しい状況であることは理解しているが、農業をはじめ、多方面に目を向ける機会を更に創出していければ良いと思う。
- 今後、更にグローバル化が進み、社会経済の価値観がどんどん変わっていく中で、画一的な教育をすることは適当でないと思う。  
本日配布された附属資料②「普通科改革の全国の事例について」の1ページにあるような、学際領域学科や地域社会学科の設置は、将来の教育投資として有効なものではないかと考える。5年、10年先を見据え、こうした発想で子どもたちを教育していくことは非常に大事な視点である。

## ②理数科

県高等学校長協会理数部会長である五所川原高等学校 大瀬校長から、次のような意見発表があった。

- 本校の理数科は、平成7年に設置されてから今年で28年目となり、現在は県内で唯一の理数科を持つ学校となった。平成26年からくり募集を実施しており、2年次から普通科と理数科に分かれたカリキュラムを実施している。
- 理数科は、自然科学や数学に強い関心を持ち、理数系の学問の研鑽を目指すとともに、より多くの理数系科目の履修と実験・実習をとおして科学的探究心を養い、将来の研究者や技術者の育成を目的としている。
- 本校の理数科の特徴として、生徒が設定した自然科学分野のテーマについて探究する、理数探究という時間がある。そういった探究学習をはじめとし、理数科ならではの講演会や関東方面への大学・研究所訪問、理数科同士の学習合宿、基礎実験等の取組をとおして、科学的リテラシーを養成しており、理系学部への大学進学実績につなげている。

特に、理数科のカリキュラムで得た経験が、総合型入試や学校推薦型の大学入試でも成果を出しており、医学部医学科や難関大学への合格にもつながっている。

さらに、理数科通信や学校通信等を定期的に発行するなど、中学生や地域への情報発信を行い、理数科の取組や進学実績は中学生にも高く評価されているところ。理数科で学びたいと思って入学する生徒も多く、理数科は本校の大きな魅力の一つになっている。

- 理数科は、普通科の理系とよく比較されるが、違いとしては、理数系科目に特化した授業が多く設定されており、特に理科では物理、化学、生物の3教科をしつかりと学ぶカリキュラムが構成されている。

2年次に行う理数探究という探究学習で科学的手法を学び、校内外で発表する機会も数多く設けており、発表スキルの習得や研究内容の一層の充実を図っている。

- 課題として、本校は直近5年間で定員割れをしており、募集人員を満たしていないことから、理数科の授業に関心を持つ生徒の確保が非常に難しくなっていることが挙げられる。本校は進学実績を期待されている部分があるが、そういった理数科の特徴が少しずつ薄れてきているのが現状。

理数系人財の育成、理系女子の育成というのは、国の喫緊の課題でもあり、理数科はその一翼を担うものだと考える。このため、本校だけではなく、ある程度出願者数の確保ができる、ニーズのある地区への設置も視野に入れても良いのではないかと思う。

- 現在、台湾と交流をしているが、グローバルな視点での取組を進め、海外の産業や環境科学の学習、研究等の共同学習を推進しながら、将来的にグローバルな内容にまで拡大していき、本県のIT産業や環境科学等を牽引する人財の育成に努めていきたい。

理数科について、委員から次のような意見があった。

- 理数科がある高校にいたときは、理科や数学が苦手な生徒もおり、科学者や研究者になるといった将来の目標がなければ、理数科を選択してもなかなかうまくいかないと思う。定員割れの話もあったが、生徒数も少なくなっている中、生徒を集めることは大変だと感じている。

- 普通科の理系とどのように差別化を図るかが課題。本校にもかつては理数科があったが、現在は普通科だけとなり、理数に特化したコースを設けるという形を取っている。

身に付けてほしい資質・能力という点では、理数科も普通科の理系も、同じような考え方で、いわゆる大学の理数系に進む人財を育成したいという意味合いが強いのではないか。科学者や研究者になるためには、理数だけではなく、英語なども含めトータルで高い学力を身に付けなければならないが、その中でも理数に特化して、理数系人財を育成することだと思っている。

本校でも、理数に特化したコースを設けていると言ったが、今年の2年生は、2クラスのうち1クラスは文系の生徒がおり、実質1クラスしかないような状況。継続的に理数系の生徒を集めることは非常に難しいと感じている。

- 普通科の理系との差別化がポイントであると考えており、理数科と普通科の理系で取り組まれていることの違い、理数科でしか学べないインパクトのある取組などを打ち出すことが必要。今の時代は他県の理数科の取組などの情報が容易に入手できるため、五所川原高校の理数科でしか学べないこと、今の時代にマッチした、地域の方にも後押ししてもらえそうな学びのある理数科となることができれば、まだまだポテンシャルはあると考えている。
  
- 理数科離れが進んでいる原因の分析は行っているのか。
  - 分析はしていない。
    - くくり募集を実施する前は、理数科単独で募集をしており、定員割れをするようになってから、くくり募集を開始し、2年生から理数科と普通科に分かれる体制になったというのは聞いている。理数科は、数学と理科に相当数の単位を割り振ったカリキュラムになっているため、生徒にとってハードルが高いというのが実情。
  
- 理数科離れには原因があると思うので、しっかりと分析していただきたい。原因が分かれば、対策も考えられると思う。
  - 極論ではあるが、理数科は不要という風潮があるのか、それとも、理数科はやはり必要なのか、その辺のお考えがあれば聞きたい。
  - 私見になってしまうが、基本的に文理融合型が理想だと考えている。大学進学に向けて、理系科目、文系科目の選択で、カリキュラムを変えていかなければならず、教員数が増えれば選択型で文理融合の学科をつくりながら対応することはできると思うが、現状の教員数だとなかなか難しい。
  
- 私は理数科出身であるが、高校卒業後、何年かして自分の高校の理数科はなくなってしまった。原因としては、大学入試制度が大きく変わったことが考えられる。国立大学一期校・二期校から共通一次へ変わったことで、理数科が共通一次に対応するのは難しいのではないかという声が大きかったが、個人的には、普通科と比べても何らハンディはないと思っている。理数科という名前が周囲の誤解を生んでいたのだと思う。
  - 五所川原高校の理数科が存続していることについては、嬉しく思っている。
  
- 大学においても文理融合型は今流行りであり、人気があることは事実。2000年頃は、学際的という言葉が流行ったが、少し経つと、今度は差別化が好まれるようになるなど、それを繰り返していくような感じがする。繰り返すまで待っていれば良いということではなく、その揺れ動く中で存続するためにはどうすれば良いのかを考えていかなければならないと思う。

- 私は特別支援学校に勤めており、特別支援学校の中でも非常に障害の程度の軽い子どもが在籍しているため、一般就労する卒業生が多い。このことは、地域や企業の方々も理解していると思っていたが、数年前に定員割れをしたことが何年かあり、それ以来、本当は理解されていないのではないかとこのことを強く感じた。本校は県内全域から生徒が集まるが、生徒を確保するため、各地域の中学校に出向き、是非本校も進路選択の一つに加えてほしいと説明に上がったことがある。このように、学校から積極的にアプローチしていかないと、なかなか理解は深まらないのではないかと考える。中学生はもちろん、その保護者が理数科の魅力をどれだけ理解しているかという観点も必要なのではないかと。

### ③外国語科・グローバル探究科

県高等学校長協会英語部会長である青森南高等学校 久保田校長から、次のような意見発表があった。

- 本校の外国語科は、今年度をもって募集停止となり、次年度からはグローバル探究科に改編される。
- 本校は、英語と第二外国語としてロシア語を学習していることから、英語科ではなく、外国語科という名前になっている。かつては、黒石高校、三沢高校、田名部高校にも英語科があったが、現在はいずれもなくなってしまい、本校にのみ外国語科があるという状況である。英語とロシア語の授業時間数が多く、国際交流の機会も多かったことから、語学スキルやコミュニケーション力を高められていると感じている。
- 積極的で、物怖じせずプレゼンテーション等をやるような性格を持った生徒が多く、これを普通科の生徒にも見せることにより、普通科の生徒にとっても大変プラスになっていると感じている。
- 様々な国際交流や探究活動を行っているため、教員の視野を広げることにもつながっている。
- 外国語は、社会情勢や経済情勢の影響を受けるため、次の3つの点が外国語科の人気のなくなった原因だと考えている。
- ・ 外国語の習得を目的にする時代は終わったと考えており、今はツールとして活用するような時代が来ている。国際交流においても、学んだ知識をどう生かしていくのかが必要ということを生徒自身も体感している。
  - ・ 英語であれば、外国語科でなくとも普通科で十分に学ぶことができることや、外国語もオンラインやスマホのアプリなどにより無料で学べることから、外国語科に入る意義が薄れてきているのではないかと感じている。最近では、保護者の影響で、韓国語を大変流暢に話す生徒が見受けられるなど、外国語は生徒の身近なものになっていることを実感している。
  - ・ 英語とロシア語の授業時間数が多いなど、言語に重点を置いた文系の教育課程が組まれているため、途中で理系に転向することが非常に難しく、中学生やその保護者が学科を選択する際に躊躇することも多いと感じている。

- これらの外国語科の成果・課題を踏まえ、次年度から始まるグローバル探究科の教育内容を刷新する。基本的には文理融合クラスにし、文系・理系のどちらにも進めるような教育課程とする。また、英語をツールとして学びながら、国際交流や探究活動の場面を多く準備していきたいと考えている。
- 今後、国際バカロレアの導入を目指しているため、探究的な学びを重視する方向で、現在、教育内容について検討しているところ。
- グローバル探究科では、国際バカロレアの理念に基づき、平和なグローバル社会の構築に貢献するために必要な探究心や多様な文化の理解と尊重の心、思いやりの心、他者と協働するためのコミュニケーション力等の幅広い教養を育成することを目指す。
- 学習内容については、SDGsの実現等をテーマに、グループディスカッションやプレゼンテーションなどの協働的な学びを重視するとともに、英語をツールとして学びながら、アウトプットを特に大事にしていきたいと考えている。
- これからの時代を生きていく生徒のことを考え、探究心や多様性を尊重する心、思いやりの心、コミュニケーション力を育成するなど、人間力、全人的な教育を重視していきたいと考えている。国際バカロレアの教育プログラムでは、理科や数学などの普通科目の履修のほか、CAS (Creativity (創造性)、Activity (活動)、Service (奉仕)) と呼ばれるコア科目が必修となっており、この中で地域貢献活動も進めていきたい。
- 生徒の進路実現に向け、学力や基礎的な知識は非常に大事ではあるが、それに加え、これから10年後、20年後を生きていく上で大事なことを身に付けさせていきたいと考えている。

グローバル探究科について、委員から次のような意見があった。

- グローバル探究科では、大学進学も考えているのか。
  - もちろん考えている。大学入学共通テストのほか、総合型選抜や学校推薦型選抜を活用しながら、生徒の進路はしっかりと保障していきたい。
- 大学入学共通テストに向けた学習と探究活動は切り分けて考えれば良いか。
  - グローバル探究科の授業では、探究的な学びを重視していきたいと考えており、普通科目をおろそかにするわけではないため、大学入学共通テストにも対応できるものと考えている。
- 本日配布された附属資料②「普通科改革の全国の事例について」の34ページに、姫路飾西高校の事例が記載されており、非常に関心を持った。STEAM教育に加え、実践的英語運用能力を育成することのことで、グローバル探究科の取組とも重なる非常に面白い取組だと思う。
  - 先程、地域貢献活動についてお話があったが、例えば産業界や大学など、関係機関との連携も意識すれば、より実践的で教育効果も上がるのではないかと考える。

- 以前、青森南高校に勤務していたことがあるが、当時の外国語科は定員割れすることも多く、中学校の先生からは、入学した時点で進路が狭められることに中学生は不安を抱いているという意見をいただいた記憶がある。このことについては、先程の理数科についても同様のことが言えるのではないかと思う。

ただ、県内の高校から英語科がなくなった今、青森南高校の外国語科・グローバル探究科については、今後も続いていくべきだと思っており、学科の特色を中学生やその保護者、中学校の先生にしっかりと理解してもらうことが必要と考える。

青森南高校のグローバル探究科においては、国際的な舞台で活躍することができる人財を育成してほしい。

- 外国語科やグローバル探究科に入るような生徒は、スピーキング力やコミュニケーション力はある程度身に付いていると思うので、グローバル社会の一員として何ができるかを考え、発見できるような機会をつくってほしい。

先程の理数科にも関係するが、小・中学生に対して、将来の夢についてアンケートを実施し、上位にどのような職種がランクインするかを分析することで、理数科やグローバル探究科の方向性も見えてくるのではないか。仮に、理数科やグローバル探究科の学習内容に関連する職種が上位にランクインしていない場合であっても、学科の魅力を理解してもらう方策を考え、国の動向も注視しながら、学科のより良い道筋を示していくことが必要。

- 自分の兄弟や子どもはグローバルな仕事をしているが、外国に出たときに大事なものは、生きていくためのテーマを持っているかということだと聞いた。言語はあくまでもツールであり、何に疑問を持ち、何を解決しようとし、何ができるかということが常に求められている。

グローバル探究科において、生徒がどういう大人と接するかが大事になると考える。教員だけが生徒に関わるのではなく、グローバルな視点を持った企業やグローバルに活躍する方など、外部人材を積極的に活用していくべきと考える。教員がファシリテーターの役割を担い、生徒の後方支援をしながら、外部人材が先頭に立って生徒を引っ張っていくような体制が理想。

→ 次年度の探究活動については詳細を詰めている段階であるが、外部人材の活用については校内でも共通理解が図られている。外部人材の活用には予算がかかるほか、コーディネートしていく上で、教員の業務量は増加し、教員数が足りないといった問題も出てくる。グローバル探究科はこの2～3年が勝負だと思っているので、予算措置、人的措置については特段の配慮をお願いしたい。

- 企業は、採用に当たって、英検ではなくコミュニケーション力に関する資格を重視しているようである。このため、コミュニケーション力の育成に力を入れていくグローバル探究科の生徒を求める企業は、これから増えてくるのではないかと思う。

先程紹介された姫路飾西高校の「学びを支えるコンソーシアム」のように、県内の大学や企業など、様々な関係機関と結びつけ合いながら、魅力発信していくことができれば、面白い取組ができると思う。

秋田県にある国際教養大学では、学生が海外留学したり、世界を舞台に事業を展開する企業へ就職したりしており、全国から注目を浴びている。青森南高校のグローバル探究科もその可能性を秘めていると思う。

- 目指すべき姿としては、端的に言えば、グローバル人財の育成だと思うが、そういった人財育成、人づくりというのは、実践的な体験が非常に重要だと考える。

例えば、農業においては、実習をとおした現場での経験・体験ができるようなカリキュラムが必要であり、グローバル探究科においてもそのような体験活動の場を多くすることで、おのずとグローバル人財が育成されると考える。

- 工業会でも、グローバル人財や理数人財を求めており、この流れは今後も続くと思われている。学科として特徴を持つことが大事。

#### ④スポーツ科学科

県高等学校長協会体育部会長である青森北高等学校 長尾校長が欠席となったため、次回会議において意見発表・意見交換を行うこととした。

#### ⑤表現科

県高等学校長協会の八戸東高等学校 清川校長から、次のような意見発表があった。

- 平成15年度に人文科が表現科へ改編され、全国で唯一の学科となっている。演劇を利用した教育が注目されている中、表現科を設置した当時の関係者には、先見の明があったと思う。
- 表現科は、俳優や演劇家を育成しているイメージを持たれるが、決してそうではなく、進路保障として、標準単位数の普通科目をきちんと学習した上で、表現や演劇、舞台芸術等に関する専門科目を幅広く学習し、コミュニケーション力や創造性豊かな表現力を育成している。高校卒業後は、総合型選抜や学校推薦型選抜も活用しながら、表現や演劇等に関する分野だけでなく、幅広い分野の大学や専修学校へ進学している。

- 1次志望倍率は、現在、多少持ち直しているものの、急激に低下した年があり、志願倍率については、近年、低下傾向にある。コロナの影響でできていなかった体験入学や本校の特色であるワークショップは、今年度からまたできるようになったので、中学校に対する入試説明会など、様々な場면을捉えて、これからの時代に求められるコミュニケーション力や表現力の必要性、表現科の魅力、求める生徒像などについて、改めて中学校の先生や中学生に伝えていきたい。

また、特色ある取組である表現科公演の時期を、今年度から7月下旬の土曜日に設定し、中学生や中学校の先生が見に来やすいようにした。表現科という名前だけで進路選択することのないよう、実際にどのような取組をしているのかを目で見て感じてもらいたい。

- 表現科では、世界的に有名な劇作家・演出家やアナウンサー、映像技術者などの専門家を外部講師として招聘し、ワークショップ等の多様な学習機会を提供することで、表現力とコミュニケーション力の育成に繋げるとともに、臆せず人前で発信できる態度も身に付けることができている。また、表現科の生徒が様々な場面で活躍することで、普通科の生徒も刺激を受け、相乗効果が生まれている。
- 地域から表現科生徒の活動を求められる機会が多く、そのたびに地域に行くことで地域貢献につながっている。また、地域に出て様々な方と関わりを持つことで、生徒は地域課題を発見し、それが学びにつながるなど、好循環が生まれていると感じている。

表現科について、委員から次のような意見があった。

- 自分の教え子に全国的にも有名な演出家がいるが、学生時代から枠に収まらないユニークさと自分の軸をしっかり持っていた生徒で、様々な困難にくじけることなく自分の興味に向かって突き進んだ結果、現在こうした仕事につながっている。表現科の生徒が全員こうした道に進むわけではないが、表現や舞台芸術などの分野に興味を持ち、将来が楽しみな生徒が全国から集まるような、大きな可能性を秘めた学科だと思う。
- 初めから表現科を希望する中学生は少ないかもしれないが、高校に入学してから、様々な迷いなども経て成長するのだと思う。全国で唯一の学科ということなので、全国から生徒を募集し、更に発展させていくような方向性でも良いのではないか。
- 表現科の存在を初めて知った。これからの時代において、グローバルな人財が求められると思うので、表現に関する専門科目について幅広く学習する機会が増えれば、更に魅力ある学科になると考える。

- 以前、八戸東高校の元校長に表現科ではどのようなことをしているのか聞いたところ、同様の質問をみんなにされるが、実際に勤めてみて、表現科の存在のありがたさを痛感するとのことだった。  
地域からイベントの出演依頼があると、1クラス30人の表現科の生徒にお願いすることが多々あり、学校と地域をつなぐために多大な貢献をしているとのことであった。それだけ地域に貢献している学科なのであれば、進路の保障など、手厚くするのが責務であり、なくしてはいけない学科だと思う。
- 外部人材を活用し、様々なワークショップ等を行うことで、表現力やコミュニケーション力を育成するといった表現科の特色や魅力を、中学生や保護者に理解してもらうことが重要。  
また、全国で唯一の学科ということなのであれば、全国から生徒を募集するという考え方も必要なのではないか。
- 現在の募集人員は30人であるが、1人でも表現科を希望する生徒がいるのであれば存続させていくという方向で良いと思う。このことは、グローバル探究科や理数科についても同様。

## ⑥総合学科

県高等学校長協会総合学科部会長である青森中央高等学校 校長 川野専門委員から、次のような意見発表があった。

- 総合学科は、普通科や専門学科と並び第3の学科と言われており、将来の進路を考え、普通科目と幅広く設定された専門科目の中から自分で科目を選択して学ぶことのできる学科として、平成6年度に制度化された。現在、県内には本校のほか、木造高校、七戸高校、大湊高校、尾上総合高校、野辺地西高校の6校があり、東北地方には39校、全国には363校ある。
- 国語や数学などの共通教科科目のほかに、多様な普通科目や専門科目をまとめて開設する総合選択科目、それ以外の自由選択科目など、普通科では学ぶことのできない科目を、自分の興味・関心に応じて選択することができ、卒業後の進路に柔軟に対応できるようになっている。科目選択の目安となるよう、相互に関連のある科目をまとめた科目群のことを系列と呼んでいる。
- 普通科目の中でも文系の科目を多くまとめた人文科学系列、理系の科目を多くまとめた自然科学系列、家庭科や家政科系の科目を多くまとめた生活科学系列、美術やデザインなどの科目を多くまとめた美術系列、商業や情報系の科目を多くまとめた情報ビジネス系列、このほかにも福祉健康系列、工業系列などがある。学校によって開設している系列や系列の名称は少しずつ異なる。

- 総合学科の成果としては、各校とも特色ある系列において、自分の興味・関心に応じた学びが生徒の満足度の高さや進路実現につながっていること、地域と連携した課題解決型学習や調査研究活動が実社会の理解を促進していることなどが挙げられる。

例えば、本校では、生活科学系列や美術系列の満足度が非常に高く、そのために本校への入学を希望する生徒が一定数いる。

また、七戸高校のように、福祉健康系列の生徒が介護福祉士の国家試験受験資格を取得できるよう、卒業後も生徒との連絡を密にするなど、手厚い指導により進路実現につなげている学校もある。

定時制課程の尾上総合高校においては、工業系列の生徒が田舎館村の田んぼアートの測量に協力するなど、系列の学びが実社会で活用される体験ができていることも魅力として挙げられる。

- 課題として、次の3つが挙げられる。
  - ・ 本来、系列は学科やコースとは異なるが、その系列を選んだ時点で選択科目が決まってしまうたり、選択の幅が狭くなったりするなど、実際には学科やコースのようになっているという事例が多く見られる。

魅力ある教育課程の編成のためには教員の意識改革が、生徒や保護者の認知度を高めるためには適切な情報発信が重要となる。

各校とも体験入学や中学校訪問、学校ホームページ等を活用した情報発信に努めているところであり、本校でも今年度から公式のインスタグラムを開設して、総合学科の魅力を発信している。

また、総合学科の特色を生かすためには、多様な科目の開設、より多くの専門教員の配置が必要。
  - ・ 総合学科の成果を上げるため、これまで以上に課題解決型学習の充実を図る必要がある。教員には、教科等横断的な幅広い教養と行動力、チャレンジ精神が求められるため、教科指導のみならず、進路指導等においても積極的な外部人材の活用が必要。
  - ・ 総合学科は専門的な科目も設定しているが、専門学科に比べると広く浅く学んでいることから、より専門的な進路に直結していない。加えて、生徒数の少ない学校では、系列数が少なく、自分が希望する系列が存在しないということもあるため、より多くの系列を開設できるよう環境を整えることが必要。
- 新たな系列の必要性等については、それぞれの学校事情によって異なることから、生徒や地域のニーズ、学校規模、教員配置等を考慮した上で、引き続き検討していく必要がある。
- 総合学科には、学力や家庭環境、進路志望が多様で、困難を抱えた生徒も多く在籍していることから、生徒が夢を持ち、自らの力で人生を切り開いていく力を身に付けさせることが総合学科の使命と考えている。

総合学科について、委員から次のような意見があった。

- 第2回検討会議の資料4「学校・学科・教育制度等の現状」を見ると、大学等進学や専修学校進学、就職とあまり偏りなく、幅広い分野の学部や学科へ進学している印象を受けた。先程も説明があったように、多様な学力の生徒や、特別な支援を要する生徒が在籍していると思うが、進路指導はどのようにしているのか。

→ 本校の進路状況は幅広く、今春の卒業生は、約200名のうち、国公立大学9名、就職が約20名で、専門学校進学者が多く、想定よりも就職が少なく驚いているところ。ただ、専門学校へ進学した後に、自分の生き方を考える生徒がいる状況を踏まえると、進路の実現という観点においては、こうした本校の環境は良いのではないかと考えている。

本校でも、総合学科は専門高校とどのような点で差別化していくのか、魅力化を図っていくのかといったことを議論しているところ。本校の美術系列は、県内の高校にはない特色ある系列であり、教員も自信を持って指導しているため、生徒の満足度も非常に高く、進路にも結びついている。

一方で、情報系の科目に課題を感じている。本当に商業科目を学びたい生徒は、商業高校に進学するだろうし、本校でそういう方向に進みたい生徒にどのような魅力ある科目を設定すべきなのか、これからの時代を見据えながら、本校でも検討しているところ。例えば、今の時代に生徒が興味を持って学習するためには、動画編集のような科目もあれば良いのではないかなど、魅力づくりに向け知恵を絞っているところ。

- 以前、総合学科がある高校に勤めていたが、当時は商業系列や農業系列、人文・理系の系列など、いくつかの系列があった。他系列の科目は選択できないことになっていたので、幅広く他系列の科目が選択できればと思っていた。

1年次に全生徒が履修する「産業社会と人間」で、自分が将来どういった仕事に就くのかなど、将来の道筋を考える授業を受けた上で、2年次から自分の系列を決めて科目を選択していくような流れは、入学時点で将来就きたい仕事が決まっていない生徒にとっては非常に良いと思う。

総合学科は開設科目数が非常に多いため、必然的に教員の授業の持ち時間数も多くなってしまふ。当時は、週21時間の持ち時間数も当然であり、教員の負担を考えると、総合学科の教員配置は手厚くする必要がある。

課題として、学びが「広く浅く」になってしまい、より専門的な進路につながらないといった記載があるが、総合学科ではオールマイティーな人財を育てるとともに、スペシャリストな人財の育成についても、科目を自由に選択できるという特性を生かせば、やり方次第では専門的な力を身に付けさせることもできると思う。

例えば、お酒を製造・販売する会社を設立したいと考えている生徒であれば、お酒の製造に関する科目とビジネスに関する科目を選択することができれば、生徒が本当にやりたいことを深く学んでいけると思う。

- 私も、以前、総合学科がある高校に勤めており、農業系列において、お酒の製造に関する科目があった。現在は、農業系列の廃止に伴い、お酒の製造に関する科目はなくなってしまったが、そういった特徴的な科目があれば、中学生に向けて良い宣伝になると思う。

先程の説明にもあったように、様々な家庭事情のある生徒や課題を抱える生徒などの受け皿のような部分もあり、多様な生徒への対応に苦慮しているという印象を持っている。こうしたことも考慮し、総合学科には更なる人的措置や予算措置が必要なのではないかと。

- 進路が決まっていない生徒にとって、インターンシップの実施は、自分の適性を客観的に理解することのできる貴重な機会だと思う。インターンシップを通じて、生徒がある分野に挑戦したいとなったときに、必要となるスキルを高めるためにはどのような進路を選択すれば良いか考えるきっかけにもつながると考える。実際に、高校ではどの程度インターンシップが行われているのか。

→ 他校の状況は分からないが、本校ではコロナの影響を受ける前はインターンシップを実施していた。コロナ禍においては、学校に企業の方を招いて、各ブースで説明してもらい形に切り替えている。今年度もインターンシップは実施せず、別の形で実施する方法を検討しているところ。

以前、インターンシップに関する調査をしたことがあり、中学生の職場体験と高校生のインターンシップの受入れ先が重なることが多く、受入れ先を探すのに苦労しているといった実態が判明した。専門高校と異なり、普通科や総合学科においてインターンシップがあまり実施されていないのにはこうした理由があると思っている。

- 総合学科で取り組まれている、情報ビジネス系列の生徒による地域と連携した課題解決型学習や、工業系列の生徒による田舎館村の田んぼアートの測量への協力など、地域と連携した取組は、生徒に誇りを持たせ、地域愛の醸成にもつながるものであると思う。このことが、結果的に地元定着につながれば良いとの願いも込め、今後のこうした取組に期待している。

## ⑦定時制・通信制

県高等学校長協会定通部会長である北斗高等学校 校長 坂上専門委員から、次のような意見発表があった。

- 本県には、県立の定時制・通信制高校が9校あり、このうち独立校が3校、全日制との併置校が6校で、私立高校3校と合わせると12校の定時制・通信制高校が設置されている。このうち、通信制課程は、私立高校3校を含む6校に設置されている。

定時制課程では、青森工業高校、弘前工業高校、八戸工業高校の3校の工業技術科が令和3年度から募集停止し、今年度末で閉課程となる。

通信制課程では、県立の通信制高校3校において、令和3年度から後期入学を実施しているほか、年度途中からの転入学・編入学等、高校入学後の進路変更への対応を進めているところ。

- 5月時点で県内の定通制課程に通う生徒は830名で、ここ3年は横ばいの状況にある。通信制課程に通う生徒は904名で、増加傾向にあり、特に私立高校が増加している。
- 生徒が定時制・通信制課程を選択する理由として、全日制での学校生活の困難さ、不登校経験による学習の遅れ、貧困家庭、特別支援学校の対象ではないが、何かしらの支援を必要としていることなどが挙げられる。
- 生徒のうち、正規雇用や、家業、自営業に従事する者は、定時制課程では3名、通信制課程では16名となっている。非正規雇用、アルバイトを含めると、定時制課程は153名、通信制課程は193名となっている。
- 昨年度の転編入を除く卒業生のうち、3年で卒業した生徒の割合は、定時制課程が112名で、全体の61.9%、通信制課程が78名で、全体の86.7%となっている。
- 現在の定時制・通信制高校をめぐる状況としては、少子化の影響で県内各地の高校が閉校や閉科となり、学力に合った近隣の高校を選びにくくなっており、遠方からの通学生が多くなっている傾向にある。

また、従前の勤労青少年のための自己キャリア形成の学びの場という役割から、近年では発達障害や精神疾患、基礎学力不足、コミュニケーション力の欠如等、様々な課題を抱えた生徒や、中学校までに不登校を経験した生徒の再起の場という側面も含め、その受け皿となっていることは確かであり、大きな役目を果たしているものと考えている。

実際に定時制・通信制高校に通う生徒の約4割が発達障害を含む何らかの障害や精神疾患等を持っていることから、多様な生徒の個々の状況に対応した支援は必須となっている。この点においては、教員だけで対応できるものではないため、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーなどの専門家の配置により、生徒は家庭環境によらず、学校生活を継続していくためのアドバイスを受けることができるようになっている。また、スクールライフサポーターが配置され、特別な支援を要する生徒を中心に学習活動のサポートが行われていることも心強い支援体制の一つとなっている。

- 各校ではスクールミッションでうたわれているように、自己肯定感と自己有用感を高め、豊かな心を持った社会的・職業的に自立した人財を育成するということを念頭に日々の教育活動を行っている。

定時制・通信制課程ならでは幅広い学びの機会の提供、生徒の多様な学習ニーズへの対応、生徒一人一人の個性を伸長するとともに、外部機関や地域との連携を生かしたキャリア教育をとおして、社会の一員となれるよう、きめ細かな支援をしている。

中でも、特徴的なものとして、通級による指導が挙げられ、本県では定時制課程でのみ行われている。他県では、定時制・通信制の高校では行わず、全日制の高校で通級による指導を行う動きが多くなっている。

県内では、平成30年度に北斗高校、令和2年度に八戸中央高校、令和4年度に尾上総合高校で開始され、現在に至っている。

今年度の本県における通級による指導の生徒数は、北斗高校で34名、尾上総合高校で22名、八戸中央高校で20名の計76名となっている。年々希望する生徒が増加し、必然的に担当教員の授業時間数が増加している。

教育課程上の位置付けや、専門的な知識を有する教員及び実施場所の確保、中学校への周知等、通級による指導に係る課題は多い。

「定通制の高校に入ると何でもやってもらえる」「一人一人面倒を見てもらえる」と思っている保護者が多く、非常に苦しい思いをしている。

このような現状の中で、特別支援学校の経験のある教員との連携、通級専用の特別教室の整備に加え、特別支援教育に関する研修を学校全体で定期的実施するなど、今できることを各校が取り組んでいる。

- いくつかある課題のうち4点に絞って述べる
- ・ 義務教育段階で不登校だったことにより、基礎学力がほとんど身に付いていない生徒が各校で増加している。いわゆる形式卒業者の学びの空白と言われている部分であり、読解力が乏しく、読み書き・計算が困難で、学び直しが必要な生徒への対応が課題となっている。入学年次で学習する国語・数学・英語の教科では、習熟度別による授業を行い、ティームティーチングによりきめ細かな指導を行うほか、通信制課程では、学び直しのための学校設定科目を開講するなどの対応をしているが、個別最適な学びと協働的な学びの実現は難しい状況。
  - ・ 近年、県内に在籍する外国人の子どもの高校への進学が増加傾向にあり、現在、県内の定時制・通信制高校に5名在籍している。今後の継続した支援体制の在り方が課題となっている。
  - ・ 全国的にも通信制課程の入学者が増加傾向にあり、尾上総合高校においては、今年度、一部の科目において選択科目の登録人数が規定の40名をはるかに超えており、速やかな非常勤講師の配置などの対応が必要となっている。
  - ・ 発達障害や特別な支援を必要とする生徒への専門的知識と経験が必須となっている。個々の抱える症状やそれに伴う困難さ・困り感が多様かつ複雑化しており、これらの生徒に対応する教員の育成が急務である。特別支援学校との人事交流と増員がなければ、校内でのOJTが進まない状況。定時制・通信制高校では、圧倒的に教員が足りないと感じている。

- 学校の配置について、6地区にバランス良く配置するという観点から、定時制課程は現状維持が望ましく、通信制課程も県立高校3校を維持することが必要。
- スクールソーシャルワーカーについては、なくてはならないチーム学校の貴重な人材であり、現在6校に9名を非常勤で配置しているが、現状を踏まえると常勤化が望ましいと考える。
- 定時制・通信制の課程は、不登校を受け入れる学校、何かしら困難さを抱えている、あるいは社会にうまくなじめない生徒が行く学校のようなイメージが強いが、多様性を重視し、学び方を選ぶというような、これからの時代にマッチした学校なのではないかと考えている。今後は、こうした新たな魅力を発信することにも注力していきたい。

定時制・通信制について、委員から次のような意見があった。

- 以前は、経済的な理由で定時制高校に入学していたイメージがあるが、現在はどうか。
  - 様々な事情を抱えた生徒がおり、その中には経済的に困難な生徒がいるというのは事実としてある。
- 経済的に困難な生徒には、学校でアルバイト先の紹介などしているのか。
  - 教員が家庭の経済状況に切り込んでいくのは難しいため、スクールソーシャルワーカーが家庭の状況を踏まえた上で、保護者や生徒との面談をとおして、アルバイトに関する情報提供を行う場面もある。ただ、本人がアルバイトができる状況かということと、アルバイト先が合わないなどミスマッチの問題もあるため、慎重に行っている。
- 以前は、定時制高校には不良が多いイメージがあったが、現在の生徒の状況を教えてほしい。
  - そのようなイメージを持っている方は実際にまだいるが、現在はそうした生徒はほとんどいない。全日制高校に通う体力がなく、短い時間でしっかりと学びたい生徒や、発達障害を含む何らかの障害や精神疾患等を持っている生徒など、多様な生徒が在籍している。
- 定時制・通信制課程を希望する生徒が増加していることから、なくしてはならない課程だと考える。
- これからの時代における多様な学びの中心になっていく学校だと考える。

- 高校と特別支援学校の人事交流については、毎年数名程度行われているところ。特別支援学校は、小・中学校や高校の要請に応じて、特別な支援を要する生徒の教育に関し必要な助言や援助を行うことが役割として課せられていることもあるので、今後も積極的に人事交流を進めていく必要がある。

人事交流には、高校と特別支援学校の双方にメリットがあると思っている。特別支援学校で行われている、いわゆる作業学習については、高校の農業や工業を専門としている教員に教えてもらうことができたり、高校においては発達障害の生徒への対応を得意とする教員が派遣されたりするなど、win-winの関係となっている。
- 様々な課題を抱えた生徒一人一人へのフォローやケアが本当に大変だということを身にしみて感じた。スクールソーシャルワーカーなど、様々なサポート体制の強化や、地域社会の理解促進が必要であると考えている。

### 3 閉会